

年 組 名前



帯広市内で収穫作業が進むジャガイモ。
全体的に小玉傾向で数も少ないという
＝3日（小川泰弘撮影）

高温少雨 細るジャガイモ

北海道内の今年のジャガイモ収穫量が、平年を大きく下回る可能性が強まっている。主産地の十勝管内やオホーツク管内を中心に、夏の少雨と高温が生育に響いたため、3割減を予想する農協もある。収穫が本格化する中、天候の影響とみられる変形も目立ち、生産者たちは懸念を募らせている。

十勝・オホーツク

「これほど一株のイモの数が少なく、小さいのは初めて。でんぷん含有量も少ない」。ジャガイモの生産量全国一の帯広市で、加工用品種「トヨシロ」などを12月で生産するAさん（52）は肩を落とす。大きく成長する時期の6、7月に雨が少なく、7、8月は猛暑が続いたことが影響しているとみられる。Aさんの畑では、平年は10センチあたり4センチ程度の収量が、今年は3センチ程度にとどまるといふ。

帯広市川西農協は、管内の収穫量は平年より2割ほど減るとみている。帯広大正農協は、主力の生食用品種「メークイン」が比較的高温に弱いこともあり、台風で平年の15%減程度にまで収量が落ち込んだ2016年より少なくないと予想。担当者は「収量は3割減、秀品は半分程度かもしれない」と話す。

北海道などによると、今年は8月に入ってから雨で、再び大きく育ち始める「2次成長」が促され、変形したり芽が出てしまったというイモも目立っている。

小玉傾向 収量3割減も 「2次成長」目立つ変形

道内の今年のジャガイモ作付面積はまだまとまっていないが、道によると約5万畧だった前年並みの見込み。今年もそのうち4割を十勝管内、3割をオホーツク管内が占め、後志管内が続いているとみられる。ホクレンは今年の出来について「特に十勝中南部とオホーツク、道南で、小玉が多いなど天候の影響を受けている」（玉ねぎ馬鈴しょ課）。よつてい農協（後志管内倶知安町）も「『とつや』はほぼ平年並みだが、『男爵』は小玉が多い」といふ。

24年の道内の収穫量は187万ト、全国の8割を占めた。ジャガイモの不作は加工業者、消費者にも影響を及ぼすという。菓子製造大手カルビー（東京）がポテトチップスなどに使用するジャガイモは約8割が道産で、うち4割を十勝管内から調達する。子会社のカルビーポテト（帯広）が収穫時期を前に8月下旬に開いた収穫祭で、田崎一也社長は「23、24年度は豊作だったが、今年度は一番雨が降ってほしいときに降らず、厳しい状況」と述べた。

価格については、札幌市内の青果店代表は「大玉はすでに昨年の1・5倍（2倍）になっている」。市場関係者も「道産が出回り始めたが、量は1割ほど少なく、卸売価格も7%ほど上がっている」といい、今後の動きを注視している。（西山花音、望月悠希）
